敗北その後

初めての自殺に失敗した。と言って、初めてのおつかいと混同されては困る。彼と我では崇高さが違う。おつかいは神聖なる、未来のための一歩だ。自殺は落し穴を真逆様に落ちる様なものだ（或は自分で掘った）

自殺をするに当り、まずしたことは身辺の整理だ。物草な私は怠惰な一人暮し生活を満喫しており、又大のカレー好きでもあったのでレトルトカレーを何種も買い込んでいた。自殺を決めてから一週間は間（なぜ一週間かは後で述べる）があったので私は一週間略毎日カレーという地獄を味った。毎日カレーでも構わないとは日頃の私の弁だが、如何に覚悟が足りぬ儘カレー好きを自称していたか分った。後半は数種類のカレーを混ぜおいし

くって死にそうと泣きつぶやきながら喰べた。

カレーが嫌いになった訳ではない。「土曜日に死ぬ」と思いながら平日仕事に打込んでいると、終業して家に帰ってご飯を炊くという行為が非常に非現実的に感じられる。最も日常的な行為こそが現実感を失なう。私は着るものがなくなって困ることを理解していながら洗濯さえしたくなかった。洗わなくていいかと白シャツの脇を嗅いだら卒倒しかけ、翌日の新聞に「自身の悪臭で死亡（笑）」という記事が載るのは嫌だと我に返り結局洗ったが。

死ぬのが一週間後と決っていたので、其日に照準を合せ日用品を消耗していった。カレーもその一種だし、シャンプーは調整もせずに丁度使い切った。米は少し余りそうだったので多目に喰べ翌日おにぎりとして会社に持って行った。ごみもプラスチックや缶、段ボールなど捨てられるものは捨てた。実際の所、

一人暮しの私が死ねば私の室は両親が片付けることになるのだろう。少しでも煩らわさないようにとものを減らした。

とは言え、シャンプーは死ぬ事を決めた前日に詰替用のものを買って仕舞っていたし、私の家はものが少い方だが人が一人で生活している以上必要なものもある（食器や服、家電などだ）これらまで完全に捨ててしまうとカモフラージュができなくなる。カモフラージュとは詰り発作的に死んだ様に装おえなくなる。なぜ発作的に見せなくてはならないかと言うと仕事の都合も弁えずに計画して死ぬのは義理が悪いという俗な理由による。

社会人として常識を欠いていると承知はしている積だ。是を以て私が仕事のできない人間であると目されても致し方ないことと思う（事実私は仕事ができなかった）しかし私は社会人であることと個人であることは全たく別のことと考えている。実務（ビジネス）と真理とは全たく別のものと考えている。反

対なのではない。これらは例えばビジネスを追い求めれば真理から離れてゆくという様な左(そ)んな単純なものではない。ただ別なのだ。ある場合には重なることもあるだろう。又(また)別の場合には対極に位(くらい)することもあろう。物持(ものも)ちは人格者ではない。然(しか)し人格者である物持ちもいるだろう。是(これ)らは夫々(それぞれ)に求めなければならぬ。決していずれかがいずれに附随(ふずい)するのではない。

私が死ぬことをきめたのは個人として、私一人の真理によってだ。私は人間というものを、自分という低俗な人間を通して眺めた人間というものを好きになることができなかった。好きな人間はいた、好きなものも沢山(たくさん)あった。しかし嫌いなものが多すぎた。仕事を始め世界が広がると、好きな人間が増えていく以上に嫌いな人間が増えていった。人間の汚(きた)ない部分も見た。それしきのことで他(ひと)は言うだろう。しかし、私は、どうしたら我満(がまん)を続けられるのかと逆に問いたかった。いつか

慣れるというのだろうか。嫌悪感は募っていった。

私が死ぬことをきめたのはこの嫌悪感が窮まったと感じた瞬間だった。私は夫まで死にたいと能く考えたが、生きていることができないと感じるようになった。呼吸を止めたいと考えるのではなく、只息苦しくなった。息苦しいことが悲しくなった。この先生きても嫌いな人間が増えていく丈とあきらめと勘違いで決め込んだ。

夫ならすぐ死ねばよかったのだが、私は小説というものを書いていた。私は文学と呼んでいた。遺書であれば、両親への謝罪、愛情表現、先立つ不孝をお許し下さい、会社への謝罪友人への謝罪など「書くべきこと」に囚われるように感じた。私は遺書代りに、遺書よりも裸形に、自分がなぜ死ぬのかを小説なら旨く表わせはしないかと考えた。

結果はご覧の通りだ。私は自分の敗北を表わすことにさえ敗北した。詩才の乏しさを嘆

いて死ぬのだと嘲笑されれば、受け容れざるを得ない。好きな人に数カ月前に去られたこと、身近な人間に失望していったことも、遠近で言えば近因に類するかもしれない。原因はいつだって一つではない。私は小説的に一つの重要な出来事が起って死を決めた訳ではない。然し遺書というものが、生きている人の為に書かれるものと仮定するならば、自己表現の手段の一つではないという当然の事実を今思い起すのならば、矢張私はたくさんの謝罪を書くべきだったろう。

この遺書代りの小説が当日では書き切れなかったため、私は死期を一週間くりのべた。こう言うと余りに社会を嘗めていて、又余りに俗だと言われるだろうが、当日死ぬには余りに仕事が中途半端でもあった。最低限の目途だけは着けよう。私は抛棄して死ぬのに凡てを抛棄することは苦にした。どうせ死ぬなら何も蚊も関係ないじゃないか。私は左右思い仕事中に屡ば脱力した。愛想よくお客

に接した後は尚更だった。一度は明確な未来の約束さえした。「また来月」私には来月などやって来ない。

私の此些細な、本の一毫程の責任感はどうして生じたものだろう。自殺に失敗した今疑問に思う。通常の責任感があればまず死なないだろう。責めて退職してから死ねば仕事の上ではまだ影響は少ない。然し私には生きるにしろ死ぬにしろ退職するという考えはなかった。第一に仕事を退めようがどこに行こうが私のきらいな人間はどこにでもいると決め込んだことがある。人里離れた所で暮すには金か圧倒的な行動力・覚悟がいる。第二にきれいに仕事を引き継いでやめる程の時間の余裕がなかったこともある。第三に、これは、呆れられることを承知で言うがやめると言い出す程のエネルギーが私になかったこともある。やめるのには理由がいる。「死ぬからです」と言っても信じられまい（引き継ぎが終り次第死ぬというのか？　案外冷静じゃない

か）「個人としてのあなた方というより、人間としてのあなた方が嫌いだからです」と言うのは喧嘩を売っているのと同じことで直ちに解職になっても可怪しくない。直ちに解職になるのと或日突然死ぬのとでは結果に差がないではないか。直ちに解職になり死ねば或は当付と思われ非常な不愉快を与えるだろう。私は私個人として死を決めたのであって特定の誰かへの恨みの為に死んだなどと思われたくない、詰り是は虚栄心だな、考えれば考える程俗に落ちるというのはどうも切ない。

第四に、これも又低俗窮まるがうちの上司の口癖が「嫌ならいつ辞めたっていいんだよ」「代りなんてどうにでもなる」というものだったのでいつやめてもいいならいつ死んでも問題あるまいと思ったこともある。大いに蔑すめ是には愚劣な当付の気もちが含まれている。左して此自分の愚劣さへの反発心で最低限の仕事はこなして死のうと思ったこともあ

るのだろう。私は日頃から現代のみゅーじしゃんの方々が「君の代りはどこにもいない」と歌うのを聞いて真理と実際を混同しているなあと思っていた。真理としての、個人としての彼であり彼女の代りは、今も昔も未来も世界のどこにも絶対に存在しない。代りという概念そのものが愚だ。然し実際家としての、世界に於て何らかの役割を担う上での彼であり彼女の代りは何人でも存在する。日本の首相は何回代っている？　彼らは其点も明らかにせず無条件に代りはいないという口振りで平気に歌うので拗けた私の様な人間は戸惑う。そうだおれの代りはいないんだ。でも本当にそうか？　おれが死んでもこの世界は当り前に回っていくのじゃないか。答は其通りで世界については当り前に回っていく。でも君がいない世界に何の意味がある？　大事なのは君であって世界ではない。だから命を大事にしなさいよと言ってくれれば少くとも私は長い年月困惑せずにすんだ。

私はみゅーじしゃんという人達は音楽を作るから尊といのであってものの道理をわかっている訳ではないのに歌詞を含めて評価する・されることが余りに愚かしく思えて仕方ないのでつい話しが外れた。という思想から私の代りなど実際誰にでも務まると思っていたことも、第四の理由に影響を与えている。まだいくつか理由を書こうかと思ったがこんな所で愚図々々している訳にはいかない。先を急ぐので省略する。

斯様な理由で私は退職もせず一週間仕事に励み、又帰って原稿用紙に書き殴り夫をパソコンに清書した。勿論今週が終れば死のうと思っていますなど言えないので至急でない仕事に「来週処理！」とメモ書きを残すなど姑息な真似もいくつかした。仕事中は死のことを考えた。「もうすぐ死ぬんだ」「早く死にたい」「どうして死ななくちゃならない」誤茶々々と考えた。取引先の相手と会った時この人と会うのは最後かもしれないと思った。然し感

傷的な気分にはならなかった。吾々はいつでも最後がどこかに控えている。人間が死ぬものである以上当り前のことだ。死が大袈裟というなら転勤でも環境の変化でもいい。今日会った人と明日会えるかは分らない。誰であってもだ。だから私も、もっと前から左右いう気もちで世に処するべきだったろう。

私は土日が休みだったのだが、金曜に死ぬか土曜に死ぬかは直前まで迷っていた。仕事の限りが付かなかったので土曜日に決行することとした。カレーの三昧境に起臥していた私だったが死ぬ当日は一日絶食することは決めていた。死ぬと糞尿が垂れ流れると聞いていたので少しでも被害を減らしたかった。腹の中をきれいにして死にたかった。それに食事は頭に霞をかける。食事をすると消化にエネルギーが消費される為とかいう理窟も聞いたが左様なことはどうでもよくとにかく喰べた後は頭が茫とする。だからこそ苛烈が溜った時は猛烈に喰べ食事に依存することも多

かったが死ぬ時ぐらい頭を清明にしたかった。其代りとしてたばこを猛烈に吸い飲みものを猛烈に飲んだ。

私は土曜日を迎えた。整腸剤を飲んでなるべく出す様に力めたが下剤を買うべきだったかと後悔した。小説は書き上がっていたので夫を入力し印刷するのに夕方頃までかかった。部屋を片付け掃除もした。徹底的にきれいにはできなかったがこの際已を得まい。机の上に遺書代りの小説と自筆の簡単な遺書を置いた。其横に夏目漱石の「それから」「野分」「こゝろ」を順に重ねた。私は頸動脈を切って自殺しようと思い立った訳であるが夫は「こゝろ」という小説に出て来るKという青年が其様に自殺していたからだった。私はこの小説を何度も読んだことがあるのに、自殺をきめた日読み返していて始めてはっとした。この方法があったか。私は自殺の方法を探す癖があった。電車を見れば飛び込んだらどうなるかと考え昔し交際っていた女性と旅

行へ行った時は事故の様に私一人が落下できる崖はないものかと探した。もしこの話しを見る女性がいたら左んな彼氏最悪だと思うだろう。偶然ではあるが私もそう思っている。そのような女性は私と気が合ったということで一度付き合ってみてはどうだろうか。

なぜ口説き始めた。私は抑理想の自殺は切腹であると予て思っていた（理想の自殺がある時点でどうかとは思うが）切腹の何が凄いと言って死の為に持続を要する点だと思う。刃を腹に突き立て更に掻き捌かなければならない。話しによると十文字に切り捌いた武士もいるという。銃による自殺は引き鉄を引きさえすれば一瞬で終る。この持続を要するか要しないかという違いはそのまま覚悟の違いとも言えはしないか。其覚悟が私にはなかった。切腹はむりだと鼻から諦らめた。しかし憧がれはあったので、此頸動脈を切って自殺するという場景に出喰した時、是なら責めて切腹に近付けると自殺することを決め

た。

夫から一週間は屡頸に手を宛てた。インターネットでも頸動脈の位置を確認した。手を宛てると力強い脈搏を感じる。私は心で「もうすぐ」をくり返した。

当日は机を其様にセットし、ものをなるべく整理した。使わないものは押入れや引出しに隠したが、私の室は資料などが多く収まりきらなかったのは大変遺憾だ。私の家はベッドでなく布団であり、お恥しい話しだが万年床であった。私はきれいに拭いた床を滑らせ布団を窓際へ移動させた。更に掛布団を床に広げ床が露われている面積を減らした。頸動脈を切ると血が噴き出るとも聞いていたからだ。なるべく部屋を汚さないよう力めた（貸主からすれば自殺された時点で新たに借りる人に説明する責任が生じるらしいのでいずれ大迷惑であろうが）更にカーテンで囲いたかったが適当な棒がなかったので折畳み傘を代用した。カーテンレールからカーテンの

端の方を一部外し折畳み傘をカーテンレールに結び付ける（その際レールと垂直になるようにする）外したカーテンをその折畳み傘の先と結び付け布団に沿うように囲いを作った。カーテンに包まっては何うかとも思ったが包まっては頸を切れないので却下した。其様に私の周り（右の頸動脈を切るつもりだったので特に右側）をカーテンや布団で囲い（私は私包囲網と名けていた）囲んだ中心に小さい卓袱台を置いた。布団を踏み付けることになり又お世話にもなるので表面や脚を丁寧に拭いた。なぜテーブルかと言えば切った後突っ伏す場所があった方が散らからないのではないかと思ったからだ。頸動脈を切った人間がどのような反応をするのか想像がつかなかった（今のご時世そういった動画もあったかと思うが挫けそうだったので見なかった）のたうち回るのかもしれないしビクビクとその場で痙攣するのかもしれない。何かあった時支えになるものがあった方が便宜だろ

うとの判断だった。

私は抜かりなく部屋をセットした後休日出勤のため職場へ向った。夜に出勤するのは始めてだったが私の職場では己々が鍵を預かっているため自由に出入りできる。コーヒーや水を買っていき飲みながら数時間仕事した。もらさないようにと慎重を期していた私だったが実際小便ぐらいは仕方ないと思い（どうせ血塗れになるのだし）しかし出るなら純粋な水の方がいいかなあと訳の分らないことを考え後半は水だけ飲んだ。どうせ死ぬのにと時々無力感に襲われ手に付かない時間もあったがもう少しと自分に鞭ち区切りのいい所までは仕事した。

帰る時は痕跡を残さないよう注意した。とは言え、ものが一ミリずれていたら異変を感じるような能力をもった人は私の職場にはいなかったので、来た時に元の位置を覚えておき大体其通りにしておくといった程度だが。電気の消し忘れなど初歩的なミスを犯さない

よう再三点検した。

帰りの電車は終電だった。終着駅は私の家の駅の二つ前であるため、三十分ほど歩いた。私は「いよいよだ」と思った。時には歌さえ歌った。現代の演奏家をばかにしておきながら現代の歌を歌うというのは気恥しいので何を歌ったかは内緒にしておこう。静かな気もちだった。私は過去何度か自殺しようと思ったことがあり、しかし其死に方などは全たく定まっていなかったので「本当に死ぬのか」「全部終る」と考え恐れ結局死をくり延べた。今回は死に方も決め「本当に死ぬのか」という問いには「本当に生きるのか」と問い返すようになった。生きるには嫌いなものが増えすぎた。私は好きと思う気もちが人間の中で一番尊といものだと思っている。嫌いと思う気もちは、尊といものとはとても思えないが、夫でも大切で純粋で、夫も自分の本體の一部だと思っている。嫌いだけを疎々かにする訳には行かない。世の中には本当に様々な人間

がいる。正しい人間も、きっといるだろう。しかし私は正しい人間に出会えなかった。私が出会った人間の中には正しい人間もいたかもしれない。しかし私が気づかなければ夫は出会わなかったことと同じではないだろうか。私がよく見なかったのだろう、そも私が正しく生きれば夫で十分だった筈、それらを含めたすべてが縁であり巡り合せであり自分が選択してきたことだろう。誰かのせいじゃない。これから先生きて、嫌いな人間に囲まれ、誰かを嫌いと思うことには耐えられない。

家に着いた。その日は気に入りの服を着ており、これを着て死のうと心に決めていた。死後どうやって発見してもらうかはいくつか考えた。どこへも連絡せず死に無断欠勤に激怒した上司に発見してもらうか、死の間際に警察に「人が死んでいる」と通報し到着するまでの間に死ぬか、家の前にアラームをセットした携帯電話を置いておきブルブルと鳴らし「中で人が死んでいます。申し訳ありませ

んが警察を呼んで下さい」とメッセージを表示させるか、しかし関係ない人に多大な迷惑をかけることになり不確実性も伴なう。自殺した人が臓器を提供できるのか調べが足りなくて知らんが私はかなり前から臓器提供意思表示カードを持っており叶うなら私の身體を使って欲しかった。夫には死体が新鮮であるのに越した事はないだろう。左右すると自分で警察を呼ぶのが至便だが自分の臆病な性格を知っている私は死の前に散々逡巡することが容易に予想できた。最後くらい思う存分考えた挙句に死にたかった。夫で、私は、親不孝の極だが母親に連絡することとした。

調べると指定した時間にメールを送るサービスがあるらしい。私は夫を利用し、「私の家に警察を呼んで下さい」とお願いすることとした。親には息子の死體など見せたくなかったが恐らく警察を呼べば顔を見て本人かの確認をするのではないか。考えたが脳力の乏しい私には夫が一番確実性を確保できる方法

に思えた。息子が死んだことを他から聞くよりも自分で知る方がいいのではないかと正当化もした（少くとも私は左右言うタイプだった）がその点については両親に聞いてみないと分らぬ。こんなヘラヘラ文章では伝らないかもしれないが、私の愚かな振舞いに捲き込むこと、本当に申し訳なく思っている。

私はメールを朝送信する様に設定した。朝ご飯の最中では困るだろうし、遅くして昼の用意などを始めていても困る。九時頃だろうか。セットした私は庖丁を研いだ。研ぐと言っても私は砥石を持っておらずシャープナーという簡易砥石といったようなものを使った。夜中にシャーシャーという金属のこすれる音が響くので昼間にやっておくべきだったと後悔した。私の家はアパートなので他の住人に申し訳ない。寝ていればいいのだが。私の庖丁はよく切れてお気に入りのものだったので最後にお付き合い頂こうと思った。研ぎ終ると遺書が置いてあるか確認し銀行のカ

ードなどもまとめておき鍵はそれぞれ付箋をつけてわかり易くしておいた。メールはセットしたがきちんと届くか分らずうちの両親は旅行が趣味だったので家にいるのか確証もなかった（自然に確認を取る方法が思い付かず確認を怠たった）ため自宅や会社など連絡して欲しい所もメモし電話のそばに置いておいた。これらを眺め回しお気に入りの服と庖丁と部屋と多くのものに捲き込み黷すことを詫まりテーブルの前に座った。

切腹に少しでも近づくよう正座した。先も言ったが小さい卓袱台だったので足が窮屈になり「あ意外に小さい」と思った。夫でも最後は身を正しゅうして死にたかったので背筋をのばした。時間は二時に近かった。私は平生二時頃寝ていたので、永い眠りに就くなら夫に合せたかった。庖丁を手に取り見詰めて考えた。やり遺したことはないかと問いかけた。言いたいことはないかと。言いたいことは沢山ある。心残りも少しある。けれど言う

べきこと、やるべきことは殆んどない。言いたいことを凡て言ったって、凡てが伝る訳じゃない。夫どころか冗長になったり、更に誤解されたりする。言うべきことはいつも糸かで、言葉はいつだって足りない。何もかもうまくいく訳じゃない。うまくいったことも、いかなかったこともある。おれは文学に出会えた、芸術のほんの一部を知った。誰にも知られなくて認められなかったけど、自分の気もちを、ほんの少し、表わせた。心残りは殆んどない。私は庖丁を強く握った。

そこから先の記憶はない。なぜか？　言うのが恥しいのでさらりと言うが私は寝ていた。起きたら朝だった。やっべえまじかよ死に損ったと頭を抱えると枕元のアラームが鳴った。万が一、死に損った時の為に小さい音でセットしていた為だ。用意がいいね！私は自分に皮肉を言い急いで母親宛のメールを削除した。時間は八時になっていた。熟睡じゃん。私はこの時も書いている今も猛烈に

恥(はずか)しい。

純然たる言い訳をするが非常に眠かった。自殺を試(こころ)みたことのある人だったらわからないだろうか、私だけ？　自殺の前は非常に眠くなる。単に疲れているだけということか、では疲れが取れたら自殺しないということなのか。真理だ何(なん)だと言っておいて夫(それ)を認めるのは勇気がいるが或(あるい)はそういうことかもしれない。しかしもし疲れさえ取っていればというなら、もし私が恋人と別れていなかったら死ななかったかもしれないし、今の職場に入らなかったら死ななかったかもしれない。「こゝろ」を読まなければ死ななかったかもしれないし、もっと明るい学生生活を満喫していれば死ななかったかもしれない。もしもをくり返せば生(うま)れなければよかったということになる。私は生(うま)れてきてよかったと思っている。命を与えてくれた二人の父と母と兄と弟とに感謝している（今言うのも何だが「敗北」の設定はフィクションだ。あくまで心も

ちさえ表現できればそれでいいので。更に言うなら私はカレー地獄を味(あじわ)ってなどいない）私がしてきた、過去の一瞬々々に存在したすべての選択を尊重している。それらと私が選択の間違いを重ねて死に至るのとは別の話(はな)しだ。

言い訳を重ねたが私は朝起きて死(し)に損(ぞこな)ったことを知って、死(し)に損(ぞこな)ったのなら生きるしかないのかなあと思った。「敗北」にも書いたが今日死ねないなら明日生きるしかないと私は常々考えていた。でも生き続けるのはつらいなあ。考えると又(また)眠っていた。先も言ったように自殺の前は眠くなるのだ。ほんとだって。目覚めたのはお昼頃だった。両親から連絡も来ていないので削除に成功していたことがわかりほっとした。とにかく気分を変えようと外(そと)に出て散歩した。雨の予報だったのに晴れていて気もちのいい天気だった。絶食は続けていたのでコンビニで飲み物を買い烟草(たばこ)を吸った。今度こそ。私は恥(はずか)しい気も

ちを抑えつつ家に戻った。

沢山寝たので今度は眠くならなかった。私は又テーブルの前に正座した。庖丁を握り頸に宛てた。深く呼吸し手を卸し庖丁をじっと見詰めた。指で頸動脈の位地を確認し又庖丁を宛てた。そとには光が溢れている。車の音が聞えこどもの遊ぶ声が響いた。私は目を瞑り開けた。呼吸をくり返した。正座で足が痛むので何度も座り直した。頸に金属の感触がする。

私は是を読んだ人の心底からの軽侮を予期して是を書いている。私のイメージでは庖丁を刺すとすぐ血が滲み出るように思っていた。しかし頸の皮は意外に厚く少し引き掻いた位では血さえ出なかった。私は一人暮しで料理をする内庖丁は引かないと切れないと分っている積りだったが引いてもまともに切れないので狼狽えた。鈍器なのだろうか。私は自分の覚悟のなさ、思い切りの悪さをお気に入りの庖丁のせいにした。私はただの

腹痛で救急車を呼んだことがある位痛みに弱く臆病な人間なので切れないことを怖れた。痛みを怖れた。頸動脈を切るには硬い頸の筋肉もあり三センチは切らないと達しないと調べていたのでこの分では三センチ所ではないと思った。今日死ねない人間は明日も死ねない。私はつぶやき又頸を引き掻いた。

素面の状態で、尋常な状態で死んでこそ其真理とやらに殉じることができると思っていた私は、屈した。酒の力を借りようと思った。しかし私は一人で飲酒する習慣がない。又コンビニにでも行って酒を買わなければならない。さっきも行ったのになあと蛆々していた所Y君という友人からメールが届いた。今日飲まないかという。私は恥もなく飛び付いた。

折角絶食していたのに飲み喰いして仕舞ったことを後悔しつつ此勢いで頸が切れればと思った。尋常にY君と別れた私は家に帰り庖丁を手に又寝た。今度は二時間ほどで目

を覚ましテーブルに向った。何を愚図々々している。こんなに愚図つくならやめればいいのにやはりこれ以上生きてはいけないという念が強かった。私の部屋は電気を消しており、暗い所で死ぬのは淋しいので背後にある台所の電気だけ灯けていた。庖丁を手に頸に宛てた自分の影がカーテンに写る。醜くい自分が醜くく死ぬ、夫丈のことじゃないか。昼間と違い夜は静かだった。庖丁をテーブルに置く音、又拾う音が自分に聞えた。怖かった、怖かった、怖かった、私は死ぬことが怖かった。死を怖れ生に執着した。然し生のことも全たく恐れた。怖れ、苦しむ、その為に頸を切ることを選んだんじゃないのか。生きていればいいこともある。しかし嫌なこともある。死には嬉しみも楽しみもないだろう、しかし嬉しみや楽しみの為に生きてきた訳じゃない。正しい人間になりたかったんだ、なれなかった。正しさなんて人間の数だけ答えがあるだろう。夫でいい、夫でいいから、みんな

がそれぞれの正しさを、人間としての正しくまぶしい生き方を、求めて欲しかった。自分ができないから人に押つけた。だから自分も人間も嫌いになったんだ。

私は五時間ほど卓袱台の前に座っていた。朝になれば仕事だったが、最終的には自分が死ぬことを信じていたので睡眠不足は気にならなかった。しかしこう書ける状況にもあることで分る通り、私は死ねなかった。最後は首を吊ろうかとも考えたが夫も私にはできなかった。私は初めて真剣に具體的に試みた自殺に失敗した。

私はこの名状しがたい愚かさを記録することで、是も文学になりはせぬかと考えた。当日私の頸には細いミミズ腫れのような痕が十数本（親からもらった身體に）残り、其痕が日焼けのあとのようにズキズキと痛んで「お前は生きのびた」「死にぞこないめ」と私を責めた。が夫も又甘ったれな私の声であったろう。

もし痕を指摘されればかゆくて寝ている時に引っ掻いたと言おうと言い前も用意していたが其必要もなかった。私は道ですれ違う多くの人達に、この人達はおれが自殺に失敗したことを知らないと心で当ったが、この人達は私が生きていることさえ知らないんだと思い直した。他に当るのは間違っている。私が不様なのは私のせいだ。私が、ここに、生きていることを誰かに知らせたいのなら、大きな声を出して、精一杯に生きて輝やかなければならない。

失敗してからの一週間で、私はこの話しを書いている。私は一週間が経過しても、まだ自分の真理だか思想だか存在だかのために死にたいと考えている。恨みや誰かのせいでなく自分のために。お前にはできないよと嘲笑されて然るべきだ。それでも今夜懲りずに自殺する。今度は砥石を買って切先まで研いだらどうかと考えている。嘲笑されても呆れられても、やってみなければ分らない。すべて

の思想には行動が伴(とも)なわなければ意味がない。其(その)行動の方向がまちがっている。左様(そん)なこと私自身が分(わか)っている。しかし人間の一生なんて所詮(しょせん)一弾指(いちだんし)の間(かん)だ。遅かろうが早かろうが大した差はない。少し喋舌(しゃべ)りすぎた。いつだって、何もかもは、うまくいかない。